

【講演記録】

上海を初めて日本人に切り拓いた青年藩士たちと岸田吟香

愛知大学名誉教授・地理学 藤田佳久

(2018年7月1日、岡崎市図書館交流プラザ Libra ホール)

1. はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました藤田と言います。石田先生のほうから色々な画面がありましたので、説明しやすいと思いながら、上海で日本人が初めて切り開いた青年藩士たちと岸田吟香というタイトルでお話してみたいと思います。大きな目的は先ほどもお話がありましたように、愛知大学のその元が東亜同文書院。その元が日清貿易研究所。それを創設したのは荒尾精。その荒尾精は岸田吟香に教えてもらったと。岸田吟香の時代のもう少し前に、この青年藩士たちが幕末に上海を訪れて上海の世界を初めて知ったということでございます。本学のルーツに関わる上海を日本人が最初どのようなかたちで知ることができたのか。上海を切り開いた人たちを、ここでは青年藩士たちと岸田吟香というかたちで話させていただきます。今日はきっちり 45 分までに終われと言われておりますから、その中でやっていきたいと思っております。

まず、上海です。上海が何故クローズアップされたのかということです。発表するにあたって直接的な経過は、幕末から上海へ出かけていた岸田吟香という人を調べていた時に、岸田吟香そのものの経験の中で日本から来た人たちと幕末に上海で交流があったのです。そういう交流をした相手は日本人の武士たちだった。何で武士たちが上海へ来たのか。何故そういう交流ができ

たのか。それがこの研究のきっかけです。2 番目の研究目的は若い士族たちが上海をどうつかまえたのか。どのようなかたちでその場所を認識していったのか。それからこれまで幕末の上海というと高杉晋作が中心人物として登場してきていました。ところが藩士たちの日記を読みますと高杉晋作というのは極めてバーチャルな存在というふうに見えてくるわけです。実際、彼はほとんど現地でしっかりした行動をとってないのです。3 番目、幕末に上海を訪れた民間人代表として岸田吟香を取り上げます。藩士たちと民間人である岸田吟香を取り上げてそれらの比較をしてみることでですね。方法としては実際に彼らが作成をした日記を読み込むことによって外から今の目的を明らかにしようとしてしました。そういうことを含めて記録の中で上海という町の特質とどんな接触をしたのだろうか。上海に対してどういう認識をしたのだろうかというところがこの研究の目的と方法であります。

2. 上海とその立地条件

先ほど石田先生から上海の地図が出ましたけれど、私は上海そのものを対象にお話します。上海は、アヘン戦争で 1843 年にイギリスが清国に勝って南京条約が結ばれる中で、上海とそれ以外に四つ港が開港させられます。イギリスは真っ先に上海を手に入れたわけです。何で上海を手に入れたの

られます。イギリスは真っ先に上海を手に入れたわけです。何で上海を手に入れたのか。それまでの上海は漁村であってあまり取るに足らないような場所でした。今の中国の中で言っても歴史的な都市としては上海は非常に弱いのです。あまり核のない当時の上海というところに何故イギリスはこだわったのかということでもあります。これは唐の時代の地図(略)で大分古いです。千年近く前になります。今の上海というのが赤いしるしで描かれ、上のほうは揚子江。ここに太湖というのがあります。

ここから溢れた水がこういうふうに上海方面へ流れてきていたのです。かつて今の上海周辺は川と沼地だったのですね。その一角に漁村として上海は成立していました。ちょうど海に面したところに今の上海がある。これは唐の時代です。これが南宋の時代(略)になりますと先ほどの湖からこういうふうに川があるので、このような別の流れが揚子江のほうにもありまして、上海の先に新たな土地が形成されてくる。これが今の上海です。長江の下流には大きな島ができています。その対岸のほうに南通市があり、今の豊橋市との提携都市です。新しくできたこの島。今こども開発されて農業地になっております。上海は海に面していないのですね。堆積してしまっ。これは清の時代の終わりの頃の上海とその周辺の地図(略)です。清の国が作った地図なのです。今とあまり変わりません。湖があっ。ちこち流れがあったのです。元々はこういうのが沼地であって、これが度重なると氾濫の中でここが繋がってしまうのです。入り口がこっちになってしまう。こういうふうに流れていっていたのがこちらへ繋

がってしまったというわけです。依然として上海はの中で命を永らえていくのです。これはどういうことかと言いますと、東シナ海は上海辺りを含めて干満の差が非常に大きいのです。特に朝鮮半島の西側は干満の差が5、6メートルあります。干潮ですと船がひっくり返ってしまう。私より年上の人は、朝鮮戦争の時に北朝鮮が一気に南のほうへ南下して釜山の周辺まで進撃してきた時に、連合国はこの半島西側中央部の仁川から上陸してこれを分断したことを知っていることでしょう。ここは非常に干満の差が激しくて遠浅の海岸だから、そんなところから攻撃してくるはずはないということ。北朝鮮側のそこは手薄になっていた。ところがそこへ、びっくりするようなかたちで連合軍側が上陸して、あっという間に北朝鮮側を挟み撃ちにして追い返したのです。その後、ソ連軍とか中共軍が入ってきて38度線で対峙して休戦となりました。

この状況は第二次世界大戦の際、ドイツがフランス占領下のノルマンディーでの連合国側の上陸作戦もそうでした。ここも大変な干満の差がありました。イギリスの海岸の港も満潮になると航行できますが、干潮の時にはとてもじゃないけれど船を出発させられない。

そういうわけでこの上海の外側の海岸線というのはごく一部を除きますと自然の港としては不適なのです。だから海岸線沿いは航行が不安定です。だから古い時代には南の地方から北京に繋がる大運河というのはこの内陸部を通っている。海岸線の外側は航行が難しいということがあるためです。では上海はどういうことかと言いますと、揚子江(長江)の河口から内側に入るとり

あえず揚子江の水位の高さに守られた支流の黄浦江に遡行してしまえば船の出し入れができる。一方、イギリスでも自分の国が、干満の差が激しくて海岸線や港まで行けませんから、河川沿いにドックを作り、閘門によって港を作っていた。そういう場所として、同じ条件を把握して、黄浦江という支流沿いにある上海に注目したということなのです。ここに上海が選ばれたという理由があることがおわかりになるでしょう。

3. 租界設置と上海港整備

イギリスはアヘン戦争の後、早速ここに乗り込んで来てこういう地図(図1)を作ります。右下側が北です。こちら側が南です。

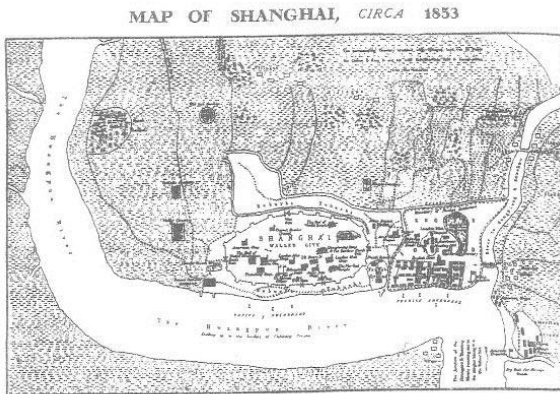


図1 1853年の上海(Oriental Affairs 1938)(地図の右下が北方面)

皆さんが先ほど写真で大きくうねっている川を見たと思いますが、こういう川ですね。これが城(町の意味)壁に囲まれた漁村の上海城(町)という町です。この北方側の沼沢地にイギリス租界ができた。イギリス側が作った教会だけでなく、競馬場もありますね。そして、すぐこのイギリスを追いかけてフランスがその南側に接して租界を設けた。周辺は低湿地です。沼地です。地盤はあまり良くないです。だからここに大きな重い石造りのビルが建てられて有名になりました

けれど、その重さで次第に沈んでいくビルが今でもあります。ここが蘇州河で、後にこの北側にアメリカが租界を作って進出します。のちに日本もここへ入ってきました。それが虹口地区^{ほんきやう}で、日本人がたくさん住む所になります。さっき紹介された東亜同文書院は上海の町の一番南のはずれです。周囲には所々に農村がありました。

こういうところにイギリスが入ってきて最初に作ったのが埠頭です。潮位が下がるからといって入り口のこういうところにロンドンのようなドックは必要ないわけですから、楽なのです。ここに入って次々と埠頭を作っていった。そうするとフランスも、また上海の人たちもまねして作ってくる。虹口のアメリカも、後に日本もみんな河沿いに埠頭を作ったのです。その川を越えた東側は浦東地区と言いますが、今はテレビ塔や高いビル街に変身しています。地盤



図2. 1880年頃

は大丈夫かなといつも思うのですが、これは1880年頃の埠頭通りです。(図2)高いビルはまだありません。この十数年前に幕末の藩士たちがここへ来たのです。それから吟香もこの少し後にここへ来たのです。当時のビルは列強が進出して建てたものです。2~3階建てのこの程度だったのです。これが黄浦江。ここへ橋を作るわけです。こ

こへ小橋(棧橋)を作って埠頭とし、大きい船はその沖へ停泊して、ここではしけの船で荷物を運んで陸上へ上がる。そういうような場所としてここが選ばれたわけです。

これが1910年頃です。(図3)



図3 1910年頃の上海港

こちらのほうを見てももらいますと、工事中の建物もありますね。少し、これらの洋館が高くなってきました。ここの部分の洋館も少し規模が大きくなってきて、これがやがてずらりと並んで高くなっていくわけです。幕府の藩士たちがここへ来たのはその50年ぐらい前ですけど、もうこの黄浦江に船がいっぱい集まっていることにびっくり仰天したんですね。ただし、当時の洋館は高くなかったのですけど。ビルが建っているというのも日本人には大変珍しかったわけで、凄い町だと思ったわけです。沢山の船の黄浦江への凝集の理由は別にあったのです。これはまた後でお話します。

1920年ぐらいになると少しずつ整備されます。しかし、こういうところにすでに多くの棧橋ができています。こちらの船から荷物を運び上げる。そういう仕組みが続いたわけです。

これは1940年頃です。(図4) 工事の風景はこの写真では写っていませんが、前の写真では工事の風景が写っています。これが

ブロードウェイマンション。一番高いビルとしてその後には作られました。こんな感じで、今これが歴史的な遺産になって、上海の名物になっています。埠頭はこんなふうに



図4 1940年頃の上海港

大にぎわいです。それぞれの埠頭はどこの国が所有するか、誰が所有するか、というのは力関係です。こういう国際化した港には税関が設けられたのですね。元々中国側の税関でしたけれど、アヘン条約、南京条約の後、その経営はイギリスが全部を一手に握り、そこの税収入はイギリスのものになっていきます。

4. 上海の町(城)と長髪賊

これが伝統的な上海の元々の漁村の町です。(図5)

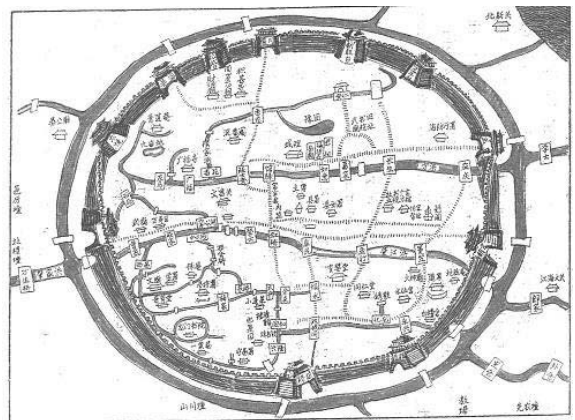


図5 1860年頃の城内図(譚振銘ら(1984)『上海史研究』より)

こういう城壁に囲まれて、海賊から町を守ったのです。この水路はこちら側が黄浦江です。だから、地形から言うと西側から東側へ水が流れていくことになります。城壁は作るけれども城壁内に水路を通してまた外へ出さなくてははいけないのです。城壁の中にも色々な湿地があるのです。これは通りのあるところ。ここは門で外へ出られます。これが古いほうの北門で老化門といって、老人の老に化け学の化けですね。フランスが進出して内紛になったときにその老化門に対して、ここにフランスが新しい門を作るようにしにきたのです。こちらが東側です。この辺のイギリス租界のところにはまた港と接していますから、色々な商売をやる人たちが沢山住みついてくる。これは南のほうの大きな門です。西のほうの門はここ。この中で一つのセンターとしてお寺ができるのです。先程石田先生の写真で、人がいっぱい池の所に並んで見物していましたけれども、あれがこの一帯です。この辺はお寺を中心にした門前町。日本で言うと県庁にあたる役所はその隣にあったのです。その外側の壕にもいくつかの橋がかかっている。これが地名にもなっていく。こういう状態です。こちらの西半分には当時まだ田んぼや畑がありました。

1860年代に入った幕末の頃、幕府の方針も開国に変わっていきます。その時に上海経由でイギリス、フランス、オランダなど色々な国が日本にも来る。あるいは日本の周りを取り囲んで来るというわけで、日本が危機感の中でやっぱり開国を迫られたわけです。その手始めに一番近いところは上海だから、上海へ行ってみようというわけで幕府が各藩に呼びかけて若い藩士を参加さ

せながら上海へ派遣船を送り出したわけです。これがその千歳丸^{せんさい}です。ところが情報が不十分なのです。当時の上海をめぐる状況というのは非常に緊迫していて太平天国の乱が起きており、長髪賊として恐れられた反乱軍は南京をおさえた後、蘇州をおさえてどんどんドンパチやりながら、皆ここ上海一帯をめざしていきます。その中で、上海だけはかろうじて壁に囲まれていて何とか残っていたが、その少し前には賊軍によって上海が占拠され、町が破壊されたりすることがありました。このような状況のど真ん中へ日本人一行の船が入ってきてしまうのです。(図6)

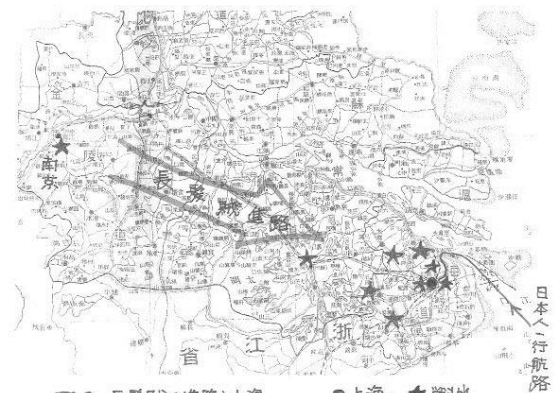


図6 長髪賊の進路と上海 ●上海 ★戦場地

船中からはドンパチが見え、火の手が上がっているのが見える。日本人の乗員は何の戦いをやっているのだ、みたいな感じで見入ってくるのです。そして上海へ入ってきたら港は船だらけ、町も人だらけ、びっくりした。大都会だよ。これは秩序の乱れた軍隊が次々に乱暴な攻撃を仕掛けてくるので、周辺の人たちが租界なら大丈夫だというわけで逃げこんできたのです。船もあちこちから皆逃げてきて先ほどの黄浦江を埋め尽くす。アメリカに行つて帰ってきた中牟田という佐賀藩の藩士は、これはアメリカ

のニューヨークよりも凄いと書いています。それぐらいこの埠頭は避難してきた漁船などの小型船で満タンだったのです。

5. 千歳丸の上海入港と藩士たちの空間行動

そこへ、最初の日本人の幕末の藩士たちがここへ入ってきたのです。1862年のことです。

その時の船の名前は千歳と書いて千歳丸。360トンぐらいで3本マスト。イギリス船を借用したものです。文久62(1862)年4月29日に長崎を出て5月6日に上海へ着いた。7月の14日、2カ月あまりのうちに帰ってくる。しかし、結果的に言いますと幕府は交渉があまり上手くいかなかったのです。この後、再度繰り返し上海へ行くのです。2回目、3回目、4回目。この3回目の時に丁度、岸田吟香がヘボンに連れられ「和英辞書」作成のための印刷に上海へ来ていたのです。そこで岸田吟香と来訪日本人らとの交流が始まりました。日本人同士の交流ですね。ところで、次の元治元年の幕府船の上海行きは短期間でしかたけど、幕府側が九州のどこかの藩が武器を上海から買いこんでいるかもしれないということで偵察に行ったわけです。その後の上海行きは貿易です。この時は南京までも行っているのです。そういうようなことがあって、幕府は上海とは貿易で何とか繋げたいという意欲があったのだと思います。

話はまた千歳丸に戻ります。若い藩士の乗組員は幕府のお役人の下にお伴として構成されていました。これだけの数の藩士たちが参加したわけです。(図7)ただ、彼らの行動をきちんと把握していこうとすると、

図7 千歳丸乗組の役人と藩士

乗組員(1) 幕府の各役人に1~2名ずつ配属された藩士

1. 根立助と郎(御勘定) { 林 三郎(会津藩)
納富介次郎(佐賀藩)
2. 沼間平六郎(長崎会社) { 深川長右衛門(佐賀藩)
松本卯兵衛(肥後藩)
3. 金子 兵八(支配勘定) { 伊藤重八 (大坂)
日比野掬次(輝寛)(高須藩)
4. 中山右門太(長崎会社) { 山崎 卯兵衛(佐賀藩)
桜木 源 藏(河津藩)
5. 鎌田三郎(衛門(目付)) { 名倉 阿子人(浜松藩)
木村 伝之助(江戸)
6. 塩沢 彦次郎(目付) { 中牟田倉之助(佐賀藩)
7. 大 〔やく之助〕 { 高杉 晋 作 (長州藩)
8. 中村 良平(長崎会社) { 芳 藏 (平戸藩)
9. 岸本 公 銅(医師) { 峯 源 藏 (大村藩)
なお水夫に五代才介(薩摩藩)

彼らが書いた記録がそろってはいないので、何ともならないところもあるのですね。そんな中でも日記がありました。まず、これは佐賀藩の人で、18歳。一番若い。また日比野輝寛は岐阜の高須藩の藩士です。そして名倉予何人は浜松藩の人です。中牟田倉之助は佐賀藩。佐賀藩は幕府から託された警護も兼ねて外と繋がりたいという意欲を持っていた。高杉晋作は長州藩、と各藩から来ています。これらの人たちが日記記録をつけていたのですね。

もう少し話を進めますと、日本人の乗員は51人です。藩士たちや役人の34人、それに水夫など、長崎の商人も3人。航海士はイギリス人に全部頼ったのです。それにオランダの商人も1人入れて合計67人で上海へ旅立ったのです。その時に大きな障害に直面したのです。乗組員は上海港へ着いてしばらく船の中で停泊したときに、黄浦江の水を飲んでしまった。ところが黄浦江の水は、上海に行った人は大体分かると思いますが、今でもきれいじゃない。当時も人の死体や糞尿から、豚の死骸などまで全てあそこへ放り込むというような川の水ですね。たちまちコレラで3人亡くなってしまった。亡くならなくてもお腹をこわして船

から出られなくなった人も沢山出た。日記を記録した人もそうなのですが、全体で行った藩士 15 人ぐらいのうちの半分ぐらいは出られなくなるという状態に直面したのです。黄浦江の水を飲んだら危ないという情報も、日本にはまだ伝わっていなかったということが分かります。

彼らの日誌記録を見てみると四つのタイプの藩士たちに分けられます。まず一番若いこの納富という藩士のタイプです。この人は「上海雑記」という記録を残していますが、川水を飲んで船から出られなくなったと。出られなくなったけれども、できる限り自分の部屋から発信をする工夫をした。上海人や噂を聞いてやってくる避難人の人たちが船内の自分の部屋まで挨拶に来たときには、そこで色々な自分の知識、あるいは持っているものを見せて交換したりするのです。すると、それを聞きつけてさらに多くの上海人が集まってくる。彼は 18 歳ですよ。言葉はできたのか。当時の清国は標準語がありませんから、各地方から来た寄せ集めの人たちは言葉が違うから筆談の交流です。船内の部屋で文字で会話交流をしたのです。これが A タイプです。それから B タイプは、体調を崩したけれども、時に租界とか古い町の中へ出向いて観察ができた藩士です。「贅脱録」という日記があります。C 型は多少体調を崩したけれども積極的に上海中を歩き回って上海人と交流した藩士です。名倉という浜松藩、中牟田という佐賀藩の藩士二人が代表格です。そしてそんな中で何もしなかったのが高杉晋作の D タイプです。高杉晋作は帰国後、凄いなだと思われ、上海というと高杉って出てくるのですが、日記によればほとんど上海を歩いてい

ません。上海人との交流もほとんどないのです。日記を見る限りではほとんど部屋の中に閉じこもっていた。時に同室の中牟田に引っ張り出され、嫌々ながら外へ出歩かされたという感じです。

当時の記録を含めて見ますと、避難民がこの上海に租界があるから大丈夫だと考え、集まってきている。これが古い城内の町、町を囲む城壁とお堀があります。こちらが黄浦江です。この外側、ここがイギリス租界。最初はいきなりイギリス租界の中へ入っていけなかったようです。先ほど競馬場がありましたが、あの辺のところからはのちに日本人がどんどん入り込んでいきました。ここはフランス租界。租界の延長上の外側まで避難民の非常に貧しい建物がずっと埋め尽くしてしまったのです。そういうわけで城内と租界と避難民の場所。こちらは漁民なども多かったところ、この時の上海は 4 地区に分かれました。当時の上海は 1860 年代の頃にはこのようなかたちで町を区分することができたのでしょう。これは日比野という人です。岐阜県の小さな藩の出身です。この人も最初、コレラだと判定され歩けなくなったそうです。ここが宿舎の旅館です。ここから宿舎の外側を見ていたのだろうと思います。

上海郊外には清国軍隊のキャンプ地があり、藩士たちは皆覗いて見たくてしょうがなかったのです。けれども簡単には中に入れない。そこで西門から外へ出ます。城壁の外側を歩いてフランス租界を通り、自分のところへ戻ってくる。その際、西門のところから一旦中へ入ってくるコースです。これは先ほどの門前町です。町の中心部分です。ここでお祭りをしているのを見たりします。

祀られた神様の関羽はお腹の大きな人です。これが中国では幸せを運んでくる神様なのです。そんな中で浜松藩の名倉は休むところを知らずに歩き回る。最初5月15日からスタートしてイギリス租界へ入って上海人と活発に交流しています。

中国の町というのは、あらゆる町に北京路とか南京路など他地域の都市名の路名がついています。これは東西の路は名称で、大きな町の地名がつきます。南北の路には全国の各省の名前がつけられています。そういう町割をしているのです。上海もようやく少し整備されてきた頃です。まだそんなにきちんとした商店街が形成されている時代ではありませんでした。

日本人が最初に上海港へ来た時、港へ集まってきた人々はみんな、長い髪の毛を垂らして攻めてくる長髪賊を恐れていました。長髪賊に対しては、上海の人たちは避難民を含めて戦々恐々としていたのです。その時に上海人の中に広まっていたある伝説がありました。この反乱賊に対して、東のほうから助け人が来るという噂です。そこへ東方の日本人の船が来たから皆港へ出て来て大歓迎でした。しかも日本人は海の上は歩くことができるというような話を信じていたので、港では大歓迎になったのです。しかし、船から降りてきた日本人を見たら、皆ちよんまげだったのを見て、人々は大笑いしたのです。そして日本人一行のあとを皆ぞろぞろついてくる。日本人も彼らの姿を見たら皆うしろに髪を流した弁髪をしているので大笑いした。そういう笑い声がお互いに湧き上がるような面白い記録が残っています。日本人が歩くとぞろぞろと上海人がくっついてくるわけです。

6. 名倉^{あなと}予何人の場合

そういう中で真っ先に浜松藩士の名倉予何人は上海人たちに少しずつ慣れていくわけです。これは6月ちょっと前になるのかな。彼は色々なコースをとって、上海の全体像を掴もうとしました。昔の古い町のほうもこのように歩き回りました。その内に上海の人たちと多く知り合うわけです。特にこの王家、王様の家と書きます。王家は上海の財閥なのです。名倉は、この人と知り合うことによってこの将軍の一族と親しくなっていて、清国の軍事訓練を見せてもらいに行ったのです。この浜松藩の名倉は清国を当時は「唐の国」と呼んでいた。そしてその唐風の戦略を学びたかったのです。武士ですから当時の日本は戦争のない時代でした。だから戦略といってもなかなかピンとこない時代ですけれども、彼は一途に歴史ある唐の国の軍隊はどんな戦闘、あるいは戦略を持っているのだろうという好奇心がいっぱいだったのです。王家を経由して色々な情報をもらったりする。そういうわけで上海の中で唐風を一生懸命探していたのです。毎日どのように歩き巡ったのかの毎日の記録を地図にしました。こんなかたちで歩き巡ったということがよく分かります。短い滞在中に本当に上海を隅々まで歩いて約百人以上の人とコミュニケーションとっていたわけです。(図8)これは彼が描いた上海の地図です。(図9)これもそういう意味でいうと良くできているほうなのです。地図も何もないときに行ってこれだけの地図を作った。ここが租界で、道路が基盤目状になっている。イギリスとフランスの両租界です。こちらが当時アメリカ租界です。

こちらが浦東地区です。こんな地図を作るところまで歩き回ったのですね。

す。(図10)また後でまとめてお示します。

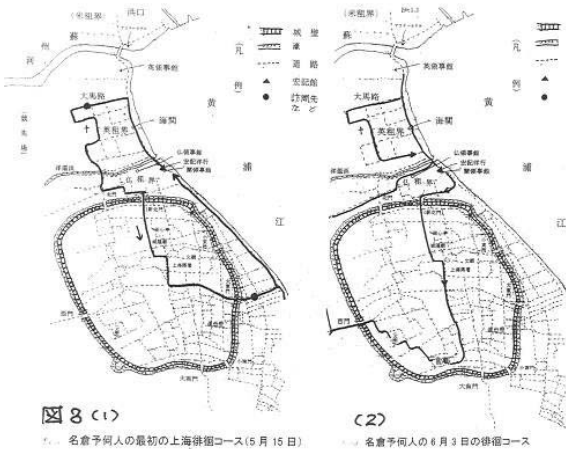


図8 (1) 名倉予何人の最初の上海徘徊コース(5月16日)

(2) 名倉予何人の6月3日の徘徊コース



図9 名倉予何人が描いた上海の概念図(右下が北)

7. 中牟田倉之助の場合

一方これは佐賀藩の中牟田の巡り方を地図化してみました。彼は英語ができて佐賀藩では海軍の担当をし、アメリカへも行っていたし、長崎周りの海の警備もやっていた。彼が一番関心を持っていたのは、イギリス、フランスの先端情報を得ることで当時の軍関係の人脈というものを一生懸命作ろうとした。そのため、名倉とは異なり、もっぱら租界との繋がりが非常に多いわけです。彼の行動軌跡はこのようなかたちになりま



図10 中牟田倉之助の6月8日の徘徊コース

8. 高杉晋作の場合

一方、高杉晋作ですけれど、彼の行動軌跡は歩いたコースが少ないものです。行動事例として取り上げる件数がほんの少ししかありません。外出したのは関係した役人や中牟田に連れてかれたりしただけで、自分からはほとんど外出していません。(図11)連れ出されたフランスとイギリスの両租界をほんの少し歩いているだけです。そして後半はほとんど出歩いていない。高杉晋作の一番の関心事は懐中時計とピストルしかなかった。中牟田と同室でしたから、それをどういふふうに入手するかで、同室の中牟田は英語ができるので中牟田に頼んで租界まで一緒に行ってもらうときだけ少し外出している。それだけです。だから彼が帰国後、上海が外国に支配されて云々といって

いたようなことは、彼は上海ではほとんど見ていないし、感じていないと言えます。高杉晋作の上海での行動はこのようにスキマだらけです。

ある。高杉はもう相手に連れて行かれるぐらいしか動いていない。こんなふうには3人の間にはっきりとした差があります。こちらの表(略)はどんな行動をとったか、どういうふうな人と会ったかを並べたものです。会った人、どのようなことをやったのかを含めて見てみますと随分差があることがお分かりいただけると思います。

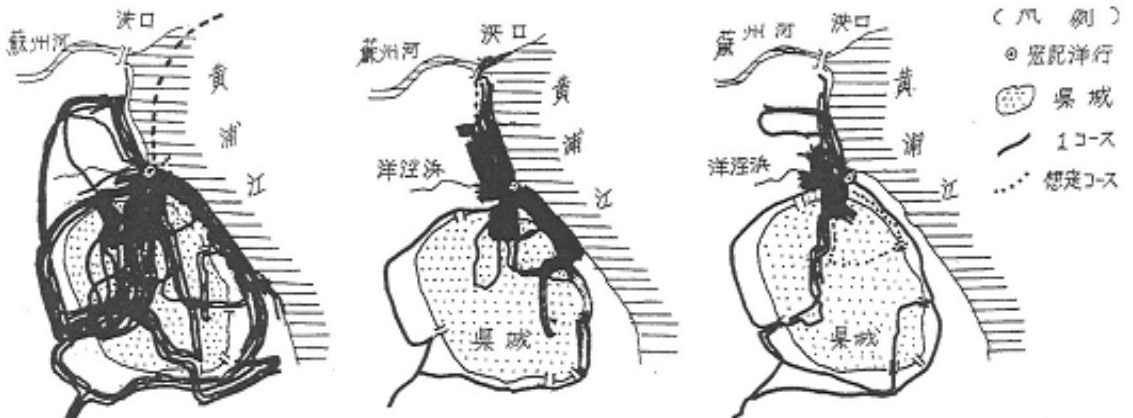
それらを見て、スタンダードをBとして主観的に判断してみました。外出する比率で言うとスーパーAは名倉、中牟田はAです。日比野B、納富は船から出られませんでしたからD。高杉はちょっと出ているからCです。上海の中をどういうふう歩いているかと言うと順にA、A、B、D、C。納富は残念ながら船の部屋から出られませんでした。上海の来客たちと部屋の中でコミュニケーションを作った。これは非常に評価できます。しかし船の外で上海の実情が分からなかった。城内、城外も次のようなかたちになる。したがってその場所がきちんと認識できたか、上海の認識ができたか、というランキング付けをしますと、名倉がトップです。対人物との交流情報もこのよ



図11 高杉晋作の6月18日の鉄道コース

9. 上海を巡った3人のランキング

3人を比較できるように彼らの行動軌跡を示しますと、次のようになります。(図12) 名倉は凄いです。中牟田は欧米型に関心が



(1) 名倉予何人(36日) (2) 中牟田倉之助(36日) (3) 高杉晋作(23日)

図12 名倉、中牟田、高杉3人の上海での行動軌跡

うなランキングになります。(図13)

図13 ≪ 上海における対露藩士の空間行動レベル ≫

藩士	外出率	上海空間				対人対 情報	上海自体 への認識	上海への アクセス度	順位
		租界	城内	城外	(空間距離)				
名倉	S.A	A	S.A	S.A	(19)	S.A	S.A	29	1
中牟田	A	A	C	B	(9)	A	B	20	2
日比野	B	B	B	B	(9)	A	B	19	3
納富	D	D	-	-	(1)	S.A	B	10	4
高杉	C	C	D	D	(2)	C	D	9	5

このようにして上海自体への認識レベルを総合的に点数化しますと29から9点。高杉はラストで、このような実態が分かってびっくり仰天したわけで、「高杉という上海」という評価は再検討が必要だと思えます。

ところで、中牟田は上海では英仏の文化や世界認識にも関心があった。外国の地図も一生懸命集めたのです。地理学の私がみても有名な地図を多く集めたことがうかがえます。農村や部屋の中だけで上海避難民たちと交流していた日比野は体調回復を待って上海の町なかへも歩き出します。その試みは一生懸命でした。高杉はそういう中で見ますとピストルと懐中時計以外はほとんど関係なかったことが分かります。そういう点で言うと高杉が上海で交流した人たちはほとんどいなかったのですね。

この千歳丸の乗組員と若い藩士たちは、日本人が初めて上海の中に溶け込んでいこうとした人たちですね。全体としてみると幕府がこの船を上海へ派遣して貿易の交渉を試みましたが、それは準備不足で失敗ですね。清国側から軽くあしらわれてしまったところがあります。突然でしたからね。それでも上海を管轄する上海道台は、日本から来訪したこの一行について、室町時代には日本との貿易交渉があったという歴史的

事実を取り上げて北京に何度も使者を派遣し、日本側と交渉していかという許可要請を願い出るのでですね。上海側からのこの室町時代に来たぞという情報がやっと生きて、なんとか追い返されなかったという清国側内部の交渉の記録がありました。しかし、幕府も開国をしたとはいえ、他国との外交交渉をやるのに、準備と時間がかかるし、何よりも相手を知らなくては出来ないという点がそう簡単でないと感じた筈です。

10. 岸田吟香の場合

次は岸田吟香の話です。これも先ほどの石田先生の話に出てきました。色々な経験をした人です。この顔は晩年ですね。ありとあらゆる仕事を日本の中でも清国でもやった人です。この息子さんが岸田劉生で麗子像の絵で有名な画家です。愛大のサイン、校旗や徽章など紋章にあたるこのロゴも岸田劉生のお弟子さんで、豊橋に豊川堂という本屋さんがありますが。そこの高須光治という人の作品です。(図14)



図14

(写真A) 上海から帰った当時の岸田吟香と義隆の岸田吟香
(写真B) 『中田吟香』加納有吾著(1911年)

校名と校章について
愛大
『愛知大学』の校名は、フィロソフィアに
よっている。単なる場所的な記号からでは
なく、「愛知」すなわち「知=智を愛する」と
いう抽象的な意味のうちに、創立者の「本学
をして永遠に智を愛する者達の殿座たらしめ
よ」との崇高な理想がこめられ、この名称が
選ばれた。
校章は愛知大学の愛と大の字を組合せて
図案化したもので、簡素なデザインで愛大を
強調することによって、建学の精神の下で知
識の歩みを続ける決意と誇りを表現している。
制定は昭和22年5月。制作は高須光治氏(岸
田劉生氏門下)の原案。

歴史的なロゴです。最近では非常に簡単な「A」を図案化したサインが愛大のロゴとして使われるようになりましたけれども、こちらの高須作のロゴの方が歴史的で、私は好きです。

11. 岸田吟香の行動空間とコミュニティ空間

岸田吟香は天保4(1833)年岡山県の山の中(美作国)の育ちで、小さい時の家は裕福だったそうですが、ちょうど彼の成長期に没落します。しかし、子供の頃から漢学の素養を持ち、津山へ出て勉強し、さらに江戸へ出て学問所で学び、江戸の津山藩でも勉強し、学問を身に着けたほどで、江戸の水戸藩邸では漢学を教えるほどでした。安政の大震災で有名な水戸藩の藤田東湖が下敷きになって死んでしまう事故がありましたが、この藤田東湖からも随分教えを受けていたのです。しかし、そのあと吟香も体調を崩して故郷へ帰り、その後大阪に出てきて再び儒学を学び、また江戸にも出て水戸学にも接近します。その関係で水戸藩の連中とは心やすい仲間ができた。しかし、ことが幕末期の尊皇攘夷の対立下で挙母藩を頼りますが、結局脱藩をし、さらに武士からも足を洗い、生きるためにありとあらゆる仕事をしたのです。そうして目を悪くしてしまったので、横浜に来ていた宣教師ヘボンのところで治療を受けた。そうしたら1週間であらゆる分野の色々な回想の言葉も知っている吟香に着目して和英辞書を作るのを手伝ってほしいと依頼し、吟香はそれを受け、原稿化を手伝います。そして1866年9月に教会の活字印刷所ができた上海へ、ヘボンに同行し、活字づくりの手伝いまで行ったのです。その上海滞在の間に日記を書いたのですが、この日記を上海へ来訪してきた武士らが皆読みたがって持って行ってしまったりしたことから6冊の内きちんと読めるの

は残された3冊ぐらいしかなかったのです。しかし、残された日記から彼の行動や考え方は伝わってきます。彼は半年後余りで帰国し、後にまた上海に渡ってヘボンが作っていた目薬の作り方を見習いながら「精錡水」の名で売り出したところ大繁盛。東京の銀座でも店を構え大繁盛させました。これをベースに吟香は新聞発行、新聞記者、船会社、石油堀、社会福祉事業、出版など、日本初に近い仕事を次々と起業したのです。

その20年後に上海に、のちの日清貿易研究所づくり、東亜同文書院の構想を持った荒尾精が訪ねて来るのを吟香は受け入れましたが、最初は信用してなかった。その荒尾精を正式に受け入れるシーンは、戦前の荒尾精についての演劇の中でよく上演されました。そのシーンは、荒尾精が岸田吟香の隣にあった花瓶をピストルで撃ちぬくシーンで、「私(荒尾)はこのぐらい清国を学びたい決意があります」と言うのを見て、岸田吟香は荒尾精を受け入れたというのです。この吟香の絵は、書院の歴史の啓蒙書を執筆中に、偶然新幹線の中で拾った岸田吟香の漫画の中の絵なんです。(図15)



すぐ出版元の小学館に電話してこれを使わせてほしいと依頼して使ったものです。当

時彼は、軍籍を外したかったのですが、清国では民間になると身が保障されないと悟され、軍人としてまずは上海での生活体験をしました。

ところで、20年前にもどし、吟香の上海初体験に戻します。やってきた上海では、その後の虹口の一角に住み、毎日古い町の外側にある印刷所へ通うことになりました。泊まっている宿舎からは英仏の租界を通過して黄浦江の河岸を南下し、町の東の小さな門の外へ通り、自由時間になるとその門から町の中へ入って見学し、上海人と親しくなっていくというパターンが生まれたのです。日記には第1巻がないため、どこに住んで、最初にどういう行動や考えを持ったかというのはよく分からないのですが、現存する第2巻目を見ると、すでにいっぱい上海の人たちと交流している。彼はここであつて学んだ竹画を描いたりしました。清国の人々も竹の絵が好きなので吟香の上手な竹画は評判となり、吟香を核としたコミュニティが膨らんでいったのです。日記の前半、12月から1月のコースはほとんどここですね。若干あちこち見て回っていますが、西の方、イギリスやフランスの軍隊のいるキャンプ地、あるいは軍事拠点へは、ほとんど行っていません。行動の中心は廟を中心とした門前町が主で、そこで上海のインテリの人たち、あるいは商人の人たちと漢学の素養を生かし筆談をしながら付き合っていたのです。お正月にはお酒を飲ましてもらったりして交流が非常に盛んでしたね。これは後半の行動軌跡図ですが、ますますこの門前町に集中しています。(図16)

岸田吟香が上海で一定のステータスを果たしていることがいえるのが具体的な交流の

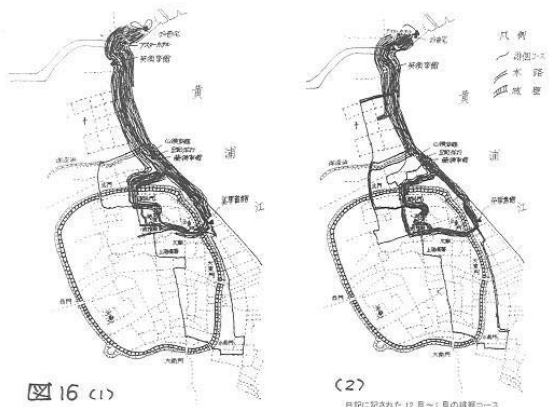


図16 (1) 日記に記された2月-4月3日の課程コース
(2) 日記に記された12月-1月の課程コース

図からです。岸田吟香はこのような商売の店も出入りし、丹念に現地の人々と交流している。この仁圃先生という方が一番吟香が信頼した先生で、敬服をしていた。非常に礼儀正しい人だと。この先生の仲間もたくさんいてそういう人たちとも繋がっていき、より広く深いコミュニティを作っていたのです。(図17)

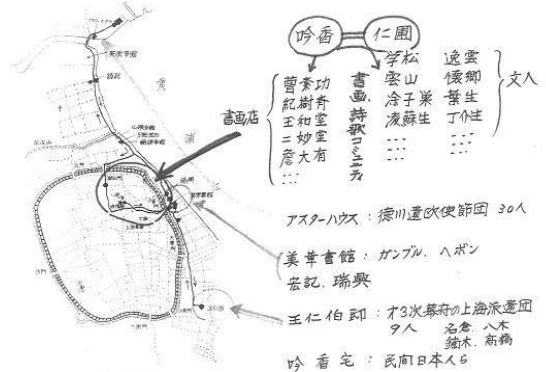


図17 吟香の1月27日の徘徊コースとコミュニティ

吟香の体格の大きさも好かれたように思います。「東洋先生」が吟香の愛称になります。虹口入口に立つホテルのアスターハウスというところに、この頃日本人の使節団がたびたび来る。フランスのパリで開かれる万国博準備の一行や幕府の派遣船も来る。あるいは土佐藩がつながり始めたフランス人の船も来る。この時すでに日本船が色々

な国へ出て行ったのです。日本の幕府の派遣団が来た時に宿がないと、吟香は彼ら藩士の中にかつての武士時代の知り合いも多かったことから、吟香の家にも泊めたりしているのです。このように、岸田吟香は先ほどの武士の人たちとはまた違った民間人としての独自の世界を築いたのです。つまり軍隊や軍事拠点にも、お役所とも関係のない、純粋の民間人として交流をしたのです。

ところで吟香は上海へ来た時、自分が上海で最初の日本人だと思っていた。ところが上海へ来たら、日本では知られてないような日本人たちが平気で香港やシンガポールに行ったり、インドへ行ったりしているのを知ってびっくりするのです。それらの何人かとも付き合っています。だから「日本は鎖国をしていた」というこの時期は、建前であって、実際には上海をはじめ東南アジアに日本人は足を伸ばしていたのです。

そしてこの上海での国際的な経験から岸田吟香は色々な情報と知恵を豊富に持ち、商売も起業します。とりわけ一番大きいのは書物の出版。これからの日本では文字は漢字ではなく「誰でも読み書きができるひらがなにすべきだ」と主張し、活字にひらがなを多用した本を出します。しかも世界を知る上では人々を啓蒙する地理の本などが重要だと考えたのです。まさに明治初期の福沢諭吉と同じですが、吟香がパイオニアと言えます。これも国際経験からの発想で清国でもそうすべきだと主張します。ガチガチの人々が読めない漢字ではなく、分かりやすい文字を使わないと、一般庶民の文化レベルは上がらないと、吟香はそういう本をたくさん出します。しかも前述のよう

に清国でも地理学の本から天文学の本まで出すべきだとし、中国の伝統的な小説の世界から科挙の受験用ポケット版まで出版します。また吟香は、それらの商品のコマーシャル、PR看板にも着目し、それらを工夫したパイオニアでした。

ところで、吟香が知ったもう一つの世界は、幕末すでに日本と清国をつなぐ船便ネットワークがあったのを知ったことでした。現代のように郵便制度がないのに普通の船を使って個人同士が手紙を日本と上海間でやり取りできたのです。8日間くらいで行ったり来たりする。このようなネットワークが背景にあって、吟香が日本にいながら、幕府を支えた考明天皇が長州川で殺されたことを知ったり、あるいは火事でたくさんの町が焼けたということを手紙から知り、心配したりしていたのです。

12. おわりに

以上から、まず、岸田吟香は、より広く深く上海人とのコミュニティーを形成しました。その中で、清国の人たちに対する視点では尊敬したり馬鹿にしたりし、またそれぞれ行動の中から彼なりに判断して、清国のトップレベルのインテリの人たちには尊敬をする。一方、庶民の人たちには文化レベルをもう少し上げなくてはということを実感した。

やがて20年後荒尾精が上海へ出てきて、岸田吟香と知り合い、漢口樂善堂経営での体験から、上海に日清貿易研究所をつくり、さらに東亜同文書院を構想していくこととなります。その過程の中で岸田吟香は東亜同文会とも関わるようになり、東亜同文会の理事になったりもしているのです。

最後に、再度3人の行動パターンと今の岸田吟香の前半と後半の図(図12と図16)をご覧になってください。この藩士たちの使節団と岸田吟香の対応ですね。それらの項目も対比的にご覧になっていただいて、どのようなかたちで先発した千歳丸の藩士グループが上海と接したかというようなことを比較いただけたらいいと思います。(表1)千歳丸は表向きは貿易交渉の実験でした。その中で機会を得た藩士たちはそ

表1 藩士たちと吟香にとっての初めての上海

事項	幕府使節団の藩士	岸田吟香
目的	上海での貿易試行、視察	和英辞典印刷への協力
滞在	1862(文久2)5~7月	1866(慶応2)9~1867.4.
組織	幕府役人との組み合わせ	ハボン夫妻に同行
行動	体綱と個性によるA-D類型	本人の個性のみ
上海人とのつながり	C型名倉:唐風を求め一族と C型中野田は欧米指向 A型 初富は華族サロン D型 高杉は 皆無	・竹画/と 詩歌、漢文の實力により上海の文人や書画店主らと強いコミュニケーションを形成 ・民間日本人とも交流
対列強	英仏軍の拠点占拠を知るも、長毛賊の攻撃から上海を守った	ほとんど関心なし (英仏軍人との交流なし)
空間認識	レベル差大 C > B > A, D	行動空間に十分な認識
継続性	名倉の王家とのつながり	・目標を軸にした学業展開へ
成果	A, B, C型と交流実績	庶民レベルの交流実績大

それぞれの目的を持って勝手に動いていることもわかります。そんな中の一人五代友厚という人物は明治になって関西を中心とした有力、有名な財界人になりますけど、当時は五代才助といい、薩摩藩出身です。薩摩の代表藩士で千歳丸に乗ろうとしたら、定員がオーバーで藩士としては乗れなかったので水夫で採用されたのです。彼が夜毎に千歳丸から抜け出して、上海をめぐる英仏軍と長髪賊の戦闘を観察に出かけていたことが戦術の藩地の日記からわかります。そういうような人も含めてバラエティーに富んだ一行でした。

しかしながら、この使節団の人たちの功績を見ると、浜松藩の名倉をはじめ、その後の藩閥関係地以外の出身藩士たちは、大きな功績を残しながら、明治維新後の藩閥政治からは重用されなかったのです。これは大変もったいない人事です。特に浜松藩出身の名倉は清国へは4回派遣されており、その後アラビア半島を経由してフランスまで行っており、アラビア世界も体験しています。こういう人達を国際人として明治政府は藩閥出身ではないとして、重用していません。その代わり上海ではほとんど何もせず見聞も不十分な高杉を重用した。その辺のギャップはその後の日本政治にも影響したはずです。

しかし、幕末の上海派遣は全体としてはそれなりの成果を上げてきたと言えるでしょう。日本人にとって初めての上海の認識ができたし、徳川幕府はその交渉過程を一生懸命に分析し、国際関係の交渉のあり方を学んだはずです。一方、岸田吟香はその後民間人としてかなり自由に上海との交流を行い、上海で日本人最初の国際商人になっていきます。そういう二つの違った視点から日本の中に上海というのが知られるようになったともいえます。これがその後、上海を日本人がどう見ていくかというベースを作っていた。その先に日清貿易研究所がある。東亜同文書院がある。その上に愛知大学になるわけなのです。そういう一つの大きな流れが上海に源流があるなということをお話させていただきました。

〈関連文献〉

藤田佳久 (2015)「幕末期に日本人が記録し

た上海像—納富久次郎と日比野輝寛の場合—」『東亜同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター) vol. 23、91-114
藤田佳久 (2016) 「幕末に上海を訪れた日本人青年藩士たちの行動空間—名倉予何人、中牟田倉之助、高杉晋作—」『東亜同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター) vol. 24、143-173

藤田佳久 (2017) 「幕末期に上海を訪れた岸田吟香の行動空間とコミュニティ形成」『東亜同文書院記念報』(愛知大学東亜同文書院大学記念センター) vol. 25、5-34